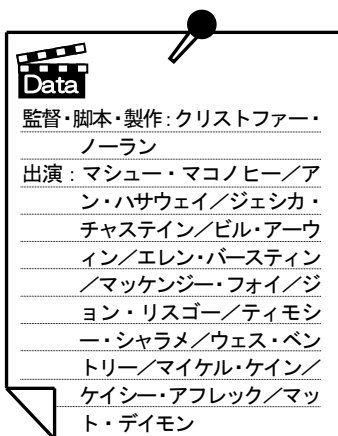




👁️👁️ みどころ

環境悪化、食料不足が進む地球では、人間の生存はもはや不可能。そうなれば、テーマは「地球を救う」ではなく、「地球から人間の移住できる惑星への脱出」となる。空想から科学へ！共産主義に向けたエンゲルスのそんな理論は現実性がなかったが、さて本作の「ラザロ計画」の現実性は？

『ダラス・バイヤーズクラブ』（13年）で20kgも減量してあっと驚く姿をみせたマシュー・マコノヒーが、本作では宇宙服に身を包んで八面六臂の大活躍！「ワームホール理論」の理解と「土星周辺のワームホールを利用して超光速で航行する」という理論にもとづく各種計画の理解が不可欠だが、本作では同時に父娘の絆をしっかりと確認したい。

必ず還ってくる！そう言うのは容易だが、5次元空間から娘とコンタクトを取り、計算上125歳にもなって地球に帰還してくるのは至難のワザ。『ゼロ・グラビティ』（13年）はアイデアと映像美の勝負だったが、本作では壮大な世界観（宇宙観？）をもった脚本に大拍手！

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■□空想から科学へ！本作もパンフレット必読！■□

去る11月16日に観た『デビルズ・ノット』（13年）は「BASED ON A TRUE STORY」の映画だったが、同作が描いたアメリカ最大の冤罪事件とも考えられる「ウェスト・メンフィス事件」をそれなりに理解するためには、パンフレットに載せられていたたくさんの解説を読み込むことが不可欠だった。それと同じように、寿命が尽きようとしている地球から人類が居住可能な惑星を探し、そこに移住するという壮大な「ラ

ザロ計画」をモチーフとした本作を理解するためには、「ワームホール理論」や「ブラックホール理論」、「5次元空間」等々の専門用語やその概念を理解することが不可欠だ。

そして、そのためには、パンフレットの「SPECIAL EDITION “ALL ABOUT MANKIND’S NEXT STEP” 特集 人類の次なる一步 宇宙航行のすべて」（25～32頁）の中にある

①二間瀬敏史（宇宙物理学者）の「“空想から現実へ” 確実に縮まりつつある宇宙への距離」

②二間瀬敏史の「時空の虫食い穴を抜けると——そこは過去の世界」

③神武団四郎（映画ライター）の「映画のアプローチ＝『科学性』＜『アメージング』」

④長沼毅（生物学者）の『マルサスの罠』と『技術革新』の一進一退の闘ぎあい」

を熟読することが不可欠だ。そもそも、あなたは「インターステラー」というタイトルからして、その意味をわかる？ 上記④によれば、「スターシップは日本語でちゃんと訳すと恒星間宇宙船。この“恒星間”というのが本作のタイトル『インターステラー』なのである」と解説されている。

ちなみに、高畑勲監督の『かぐや姫の物語』（13年）（『シネマルーム32』未掲載）やトム・クルーズ主演の『宇宙戦争』（05年）（『シネマルーム8』114頁参照）は、完全に空想の物語だった。また、1902年に作られた14分のモノクロ・サイレント映画『月世界旅行』も、当然空想の物語だった。マルクスと並んで社会主義・共産主義思想の理論を支えたエンゲルスは、1880年に『空想から科学へ』を発表し、共産主義社会の到来は空想ではなく現実だとアピールしたが、さて現実とは？ しかして、本作にみる「ラザロ計画」は単なる空想？ それとも、空想から科学へ？

■「ブラックホール」とは？「ワームホール理論」とは？■

私も若い頃によく観たTV番組『宇宙大作戦』では、「ワープ」という言葉がよく登場していた。ウィキペディアによると、これはSFに登場する超光速航法の1つで、「スペース・ワープ航法」、原義「歪める」から「宇宙空間歪曲航法」などとも呼ばれるもので、TVアニメ『宇宙戦艦ヤマト』（74年）やアニメ映画『宇宙戦艦ヤマト』（77年）にもよく登場していた。

また、「ブラックホール」とは一体ナニ？ ウィキペディアによると、これは極めて高密度かつ大質量で、強い重力のために物質だけでなく光さえ脱出することができない天体のこと。また、本作で最大のポイントになるのは、「ワームホール理論」。ウィキペディアによると、これは時空構造の位相幾何学として考えうる構造の1つで、時空のある1点から別の離れた1点へと直結する空間領域でトンネルのような抜け道のことだ。ワームホールという名前は、リンゴの虫食い穴に由来する。つまり、リンゴの表面のある1点から裏側に行くには円周の半分を移動する必要があるが、虫が中を掘り進むと短い距離の移動で済む、ということだ。ワームホールが通過可能な構造であれば、そこを通ると光よりも速く時空

を移動できることになる。

かつてアメリカとソ連が対立した「東西冷戦」時代、アメリカとソ連は同時に宇宙開発でもしのぎを削っていた。近々、映画『ガガーリン 世界を変えた108分』（13年）が公開されるが、ガガーリンは1961年にソ連のボストーク1号で世界初の有人宇宙飛行を成功させた人物。他方、「アポロ計画」を推し進めたアメリカは、1967年1月27日にアポロ1号の火災事故という大惨事があったものの、1968年10月に発射されたアポロ7号によって、アポロ計画における最初の有人飛行が実現した。

ちなみに日本では、「はやぶさ」計画があり、その「はやぶさ」計画の成功と人類初の宇宙計画サンプルリターンの成功を描いた映画『はやぶさ 遙かなる帰還』（12年）（『シネマルーム28』220頁参照）がある。また、11月23日付産経新聞は、4年前に小惑星の物質をはじめて地球に持ち帰った探査機「はやぶさ」の後継機「はやぶさ2」が30日、種子島宇宙センター（鹿児島県）で打ち上げられることを報じている。

■□■環境悪化は？食糧不足は？■□■

去る11月10～11日に中国の北京で開催されたAPEC（アジア太平洋経済協力会議）では「APECブルー」を目指す活動が紹介され、それが実現した。これは、近時北京で深刻化しているPM2.5による大気汚染をAPEC期間中だけでも改善し、青空を取り戻そうという取り組みだった。もっとも、PM2.5問題は北京だけではなく、インドでも深刻なことが、2014年5月にWHO（世界保健機関）が発表した「世界91カ国・1600都市の大気汚染状況を分析した報告書」によって明らかになった。同報告書によると、PM2.5の濃度が高い上位20都市のうち13都市をインドが占め、さらに上位4都市をニューデリー等インドの4つの都市が占めたようだ。

他方、私が小学生の頃に夢中になって読んだパウル・バックの小説『大地』（1931年）では、土に根を張って生きる農民がいなごの大群に悩まされる姿が印象的だったが、本作の舞台となるアメリカ中部の田舎町も、ここ数年は異常な砂埃や砂嵐によって深刻な大気汚染はもとより、トウモロコシや穀物は甚大な被害を受けていた。このまま環境悪化が進めば地球はいずれ滅亡・・・？地球温暖化の危険を含めて、そんな危機は今でも現実的テーマになりつつあるが、さて本作では・・・？

■□■この父娘の絆は？この異常現象は？■□■

本作の主人公クーパーを演じるのは、私の大好きな映画『評決のとき』（96年）でジェイク・タイラー・ブリガンス弁護士役を、『リンカーン弁護士』（11年）（『シネマルーム29』178頁参照）でミック・ハラー弁護士役を、『ダラス・バイヤーズクラブ』（13年）（『シネマルーム32』21頁参照）で20kgも減量してエイズ患者ロン・ウッドルーフ役を演じた、マシュー・マコノヒー。クーパーは元パイロット兼エンジニアだったが、今はアメリカ中部の田舎町で義父ドナルド（ジョン・リスゴー）と共にトウモロコシ栽培



【初回限定生産】インターステラー
ブルーレイ&DVDセット ¥3,790円+税
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント

を営んでいる男だ。本作の導入部では、そこに起きる砂嵐などの異常気象とクーパーの10歳の娘マーフ（マッケンジー・フォイ）の部屋で起きる異常現象がポイントになる。

異常現象の第1は、部屋の棚から本がひとりでに落ちていくこと。いかにも雑然と落下しているが、ひょっとしてこの落ち方には何らかの法則性が？ 異常現象の第2は、吹き込んだ砂埃が異様な模様を描くように整列していたこと。これもひょっとして、誰かの何らかのメッセージ？ 全編そういうテイストで貫かれた映画が、『シックス・センス』（99年）や『サイン』（02年）（『シネマールーム2』237頁参照）、『ヴィレッジ（THE VILLAGE）』（04年）（『シネマールーム6』310頁参照）等のM. ナイ

ト・シャラン監督の世界観にもとづく作品だが、本作で示されるそれは、その後、NASA（アメリカ航空宇宙局）の秘密施設で極秘裏に遂行されている「ラザロ計画」を描くための導入部にすぎないことがその後次第に明らかになっていく。

30～40分間も続く導入部を観ている限り本作は何の映画かサッパリわからないが、突然入り込んだ謎の秘密施設でクーパーがアン・ハサウェイ扮する美しい女性科学者アメリカ・ブランド、そしてクーパーの恩師でアメリカの父親であるブランド教授（マイケル・ケイン）と意外な「ご対面！」を果たすと、その後のストーリーは意外な方向へ。

■□■壮大な世界観（宇宙観？）をもった脚本にビックリ！■□■

本作は監督、脚本、製作したクリストファー・ノーランが、弟であるジョナサン・ノーランの書いた脚本に魅かれて、公開が実現したもの。クリスがジョナの脚本に魅かれた理由は、第1に物語の核とされている父と娘の信頼。そして第2に将来、いつか、人類が地球を離れて、宇宙の他の場所に住むところを探さなければいけない日は来るのだろうかという問いかけてくるストーリー、にあったらしい。本作導入部のシークエンスは、本作ラストの5次元空間での父クーパーと娘マーフ再会のシークエンスに結びついて大きな感動を呼ぶが、それは第1の要素だ。それに対し第2の要素は、秘密施設に入り込んだクーパーがブランド教授とアメリアからの説明を聞くところからスタートする。

クーパーが驚いたのは、公式には廃止されたはずのNASAが今なお存続していること。また、そこでは地球規模の危機から人類を救いだすための「ラザロ計画」と呼ばれる宇宙探査プロジェクトが進められていたことだ。そこでは「Aプラン」と「Bプラン」が用意されていたが、さて、その内容は？さらに、アメリアの説明によれば、プロジェクトの中心人物である理論物理学者のブランド教授が提唱する「土星周辺のワームホールを利用して超光速で航行する」という理論をもとに、すでに12名の宇宙飛行士たちを前人未到の未開の地へと向かわせており、①マン博士（マット・デイモン）、②生物学者ローラ・ミラー、③素粒子物理学者ウルフ・エドマンズの3名から新惑星発見の連絡が入っているというからすごい。今、そこまで計画が進んでいるとなれば、さて、これからやるべきことは？

NASAでのクソ難しい議論の中で少しずつ明らかになっていく壮大な世界観（宇宙観？）には圧倒されるばかりだ。そんなすばらしい脚本にビックリ！

■□■クーパーのミッション①は？その遂行は？■□■

そこでクーパーに与えられたミッション①は、アメリアの他、ドイル（ウェス・ベントリー）とロミリー（デヴィッド・ジャーシー）を宇宙探査クルーとして乗せ、元軍用ロボットTARS（声：ビル・アーウィン）を従えた新たな宇宙船「エンデュランス」のパイロットとなることだ。ええー、そんなこと急に言われたって……。いったんそんなミッションを引き受けたら、一体いつ地球に帰還できるの？

去る11月10日、高倉健が83歳で亡くなったが、ケンさんの名曲『唐獅子牡丹』（66年）の冒頭の歌詞は「義理と人情を 秤にかけりや 義理が重たい 男の世界」。まさか、クーパーがそんな基準で自分の行動を決めたわけではないだろうが、クーパーにとってマーフや家族との「人情」よりもブランド教授やNASAとの義理を尊重したのは、男としてある意味当然。しかし、まだ10歳のマーフはいくら父親が「必ず還ってくる」と約束しても、それに納得できなかったのは仕方ない。

さらに、出発の朝、マーフに示す砂の模様はモールス信号で「STAY（留まれ）」と伝

えていたから、マーフは何とかしてクーパーを引き留めようとしたが、クーパーはマーフとの抱擁を交わすこともないまま、出発することに・・・。

■□クーパーのミッション②③は？その遂行は？■□

第86回アカデミー賞で監督賞と撮影賞を受賞した『ゼロ・グラビティ』（13年）は、冒頭から観客をゼロ・グラビティ（無重力）の中で宇宙遊泳する世界に誘ってくれた（『シネマルーム32』16頁参照）が、本作前半はクーパーがミッション②、③を遂行していく姿がメインストーリーとなる。

ミッション②は想定どおりのミッションで、「ワームホールを潜り抜けろ」というもの。これはすなわち、クーパーはクルーを乗せた母船「エンデュランス」を操縦して、まずは計画どおり、土星近辺でワームホールに到着。次に熟練した操縦術で球状のゲートを潜り抜け、先発組パイロットの待つ惑星へ、ブラックホール「ガルガンチュア」を利用して、瞬時に移動することだ。こう書いても何のこともサッパリわからない人もいるかもしれないが、そんな人は再度しっかり勉強のうででスクリーンを。

続くミッション③は全く想定外のもので、「海の惑星から脱出せよ」というもの。すなわち、地表を浅い水が覆う海の惑星に降り立った一行が発見したのは、残念ながら生物学者ローラ・ミラーの遺体と機体の残骸だった。さあ、次はどうする？その直後に巨大津波が発生したから大変だ。降下艇「レインジャー」のエンジンは水に浸かり、作動不能となってしまったから、クーパーはいかにしてそこから脱出し、母船「エンデュランス」まで帰還するの？そのスリルとサスペンス（?）、そしてその科学性（?）についても、あなたの目でしっかりと。

■□ミッション④では、意外な展開に！■□

物事の遂行は、必ずしも（机上の）計画どおりに進まず、思いもかけないトラブルが発生することがある。宇宙開発という「何でもはじめて」の計画にはそれが付きもので、現実の話としては、1967年のアポロ1号の打ち上げ失敗はその典型だ。そして本作では、せっかく前人未到の惑星に先着していた生物学者ローラ・ミラーの死亡がその典型だ。そんなトラブルによる燃料不足等のため、母船「エンデュランス」は素粒子物理学者ウルフ・エドマンズが待つ惑星と、天才科学者マン博士の待つ惑星の両方に行くことはできず、どちらか1つを選ばざるをえなくなっただけだ。

ここで意外だったことは、ブランド教授の娘で優秀な科学者だったはずのアメリアが、そんな重大な選択の中にエドマンズとの男女間の気持を介入させたことだ。素早くそれを読み取ったクーパーは、冷静に（冷たく？）逆にマン博士の待つ惑星への飛行を決定したが、このような全員一致ではない決定は、後にしこりを残すのでは？そんな心配をしていたが、クーパーの巧みな操縦によって一行は無事マン博士の待つ惑星へ到着。そして、そ

こで「冬眠中」のマン博士を発見し目を覚まさせると、スクリーン上では感動の再会シーンが登場する。そりゃそうだろう、マン博士にしてみればこの再会はまさに「九死に一生」を得たものになったはずだ。

ところで、マン博士を演じるのはマット・デイモンだから、本来ならマシュー・マコノヒー、アン・ハサウェイと並ぶ3枚看板になるべきではないの？感動の再会シーンを観ながらそんな疑問を持ったが、同じ日に観た『ランナー・ランナー』（13年）で、マット・デイモンの盟友であるベン・アフレックが「悪役（?）」を演じたのと同じように、本作ではその後豹変して悪役になるマン博士をマット・デイモンが演じることになるからそれに注目。その結果、クーパーのミッション④は「氷の惑星から脱出せよ」となる。すなわち、「先発組でもっとも優秀なマン博士の待つ氷の惑星に到着した一行は冬眠中の博士を発見。しかし感動の合流も束の間、惑星を脱出するためにマンは後発組を裏切り、母船を奪おうと画策。クーパーたちを振り切ったもののシャトルの操作を誤り……」ということだ。たしかにマン博士の心情はわからないでもないが、ここにみる彼の行動は結果的に天才科学者の名を汚すことになるものだ。

地球からはるか遠くの宇宙空間の中でさえ、やはり人間の営みである以上、「人情の機微」から免れないことをあらためて痛感！さて、マン博士とクーパーとの対決（?）の行方は……？

■□■ミッション⑤はクーパーの「正直度」が問われる展開に■□■

シャトルの操縦にかけてはマン博士よりクーパーの方が断然上！それを立証する形で、何とかクーパーとアメリアは母船「エンデュランス」に帰還したが、マン博士のシャトルが爆発してしまったため、母船も大きな被害を受けることに。本作のパンフレットの12頁には、「人類の命運を握る宇宙船『エンデュランス』」という詳細な解説があるので、これも必読。これを読まなければ、クーパーが残ったただ1つの惑星であるエドマンズの待つ惑星へ、どのようにして進もうとしているのかが理解できないはずだ。

母船「エンデュランス」には、降下艇「レインジャー」の他、物資や人員の輸送のために使う大型降下艇「ランダー」が備えられていた。そこで、クーパーに課せられたミッション⑤は、大きな被害を受けた「エンデュランス」を見捨て、全物資を積んだ「ランダー」を使ってエドマンズの待つ惑星へ到着することだ。そのためにスクリーン上に登場するさまざまな操縦テクニックは難しいが、このシークエンスのポイントはそこにあるわけではない。ここでのポイントはクーパーの「正直度」だ。

この時代では人間の正直度をちゃんとコンピューターに登録することによって、人間とロボットのTARSらとのウィットに富んだ会話が成り立っているわけだ。しかして、当時クーパーの正直度は90%と設定されていたらしい。しかし、ここまで共にさまざまな困難を乗り越えてきたアメリアは、クーパーの正直度をほぼ100%信用していたが、こ

ここでは俄然それが裏切られることに……。つまり、2人で一緒にエドマンズの待つ惑星へ到着することは不可能と判断したクーパーは、アメリアへの説明とは裏腹に、自らを犠牲にしてアメリアだけを「ランダー」に乗せて送り出すという手段をとったわけだ。もちろん、ここでアメリアはクーパーに対して「うそつき！」と批判することはできるが、そのウソが自らを犠牲にしてアメリアに後の任務を託する行動だということがわかると……。

■□■ミッション⑥にみる、5次元の世界でのコンタクトは？■□■

本作でクーパーを演じたマシュー・マコノヒーがジョディ・フォスターと共演した映画『コンタクト』（97年）では、女性宇宙飛行士に扮したジョディ・フォスターがワームホールを経由して異星人とコンタクトを取る姿が描かれていた。しかして、本作のクライマックスでは、アメリアを乗せた大型降下艇「ランダー」をエドマンズの待つ惑星へ送り出した後、宇宙を漂いワームホールに吸い込まれてしまったクーパーが、5次元の世界に迷い込みながら、今はNASAでブランド教授の下で科学者として働いているマーフ（ジェシカ・チャステイン）とコンタクトを取るストーリーが描かれる。

中・高校生の時に2次方程式、3次方程式が苦手だった人は、きっと3次元空間も苦手だろうから、本作の5次元の世界を描くクライマックスの理解は難しい。しかし、本作では映像上のさまざまなテクニックが補ってくれるから、クーパーが5次元の世界をさまよいながら、10歳の時のマーフ、NASAで働いている今のマーフと必死にコンタクトを取ろうとする様子は十分理解できるはずだ。そこで大きな役割を果たす小道具が、父娘が別れる際に父の形見（？）として置いていった腕時計。時計の針は前に進むだけで後ろに戻ることはありえないが、何らかの力によってそれが前にいったりバックしたりすると……。？しかも、それがあつ法則性を持つた動きをしていることが読み取れると……。

これは、あの時の本棚から落ちた本や砂埃が作る模様によってコンタクトを図っていたのと同じ！10歳の時から勘が鋭かつたうえ、今やNASAでブランド教授の後継者になっているマーフなら、それを見抜くことができたのは当然だ。しかして、本作クライマックスでみせるクーパーのミッション⑥は「マーフにメッセージを伝えろ」だが、さてその展開と結末は……？

■□■計算上125歳の父が、老年期の娘と再会！■□■

タイムスリップをテーマにした映画は多いが、いくらワープしても、いくら土星周辺のワームホールを利用して超光速で宇宙船が航行しても、地球から土星へ行き、さらに人間が居住可能な惑星まで行ったり来たりしていると、当然人間は年を取っていくもの。もっとも、計算上はいくら年を取っても、「冬眠」していれば肉体は年を取らないそうだから、単に待つだけならマン博士のように「冬眠」するのがベストだ。

本作冒頭の舞台はアメリカ中部の田舎町だったが、ラストの舞台はブランド教授の計画

したとおり、既に多くの人間が移り住んでいる居住可能な某惑星となる。その国がアメリカなのかどうか、人口は何人なのか等々の詳細は不明だが、そこではNASAで大活躍していたクーパーの娘マーフが既に老年期となり、死を迎える状態になっていた。それに対して、5次元の空間から10歳のマーフ、NASAで働いているマーフにコンタクトを取っていたクーパーは、まだまだ若々しい姿だ。その結果、スクリーン上には若々しい父親のクーパーが、死の直前の老人マーフ（エレン・バースティン）を看取るという奇妙な風景が登場する。さすが、『インセプション』（10年）で何とも言えない奇妙な空間を作り出したクリストフ



【【初回限定生産】インターステラー
ブルーレイ&DVDセット ¥3,790円+税
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント

ファー・ノーラン監督だけのことはある（『シネマルーム25』未掲載）。

ちなみに、本作導入部のアメリカ中部の田舎町のストーリーは30～40分続くが、そこではある老女の独白シーンが登場していた。そして、彼女はそこで「父は農夫でした」「彼はその仕事を愛していました」等と語っていた。NASAのシーンに移ってから私はこの導入部をキレイに忘れていたが、ラストに至って老女になったマーフがベッドの上に横たわっているのを見ると、なるほど なるほど……。169分という本作がいかに緻密な計算のうえで構成されているのかを、あらためて確認することができるはずだ。

今年のアカデミー賞へのノミネートは確実だと思われるクリストファー・ノーラン監督の快心作に拍手を送りたい。

2014（平成26）年11月28日記